

# 高校の進路指導の「現状」と「変化の兆し」

山下真司 リクルート「キャリアガイダンス」編集長

リクルート進学総研が隔年で実施している「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」は第19回を迎え、先般2月にその結果を発表した。教員の多忙さが叫ばれる中、複雑化する入試の仕組みや個々の生徒に対する指導等、多様化する進路指導の実態が浮き彫りになった。本企画では、調査報告書ならびに、高校教員向けの進路指導・キャリア教育専門誌『キャリアガイダンス』より、そのポイントをお伝えしたい。



【調査概要】	
「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査2016」	
●調査目的	全国の全日制高等学校で行われている進路指導・キャリア教育の実態を明らかにする
●調査方法	質問紙による郵送法
●調査対象・対象校数	全国の全日制高等学校4807校の進路指導主事
●調査期間	2016年10月6日(木)～2016年10月28日(金) (11月4日(金)到着日まで集計対象)
●有効回答数	1105校(回収率23.0%) *設置者別:国立784校、私立309校、無回答12校

## 進路指導に難しさを感じている？

### 9割が難しいと感じている

進路指導を担当している先生方は進路指導の難しさをどう感じているのだろうか。「非常に難しい」割合は経年で見ると減少傾向にあるものの、「やや難しい」を合わせると約9割が「難しい」と感じており、過去調査と比較しても状況に大きな変化はない(図表1)。大学進学率別に見ると、40%未満が2010年の調査では厳しい景況感の中で53%が「非常に難しい」と感じていたものの、今回の調査

では30.2%と他クラスターと比べて大差はない。そんな中、大学や専門学校、就職等、生徒の多様な進路への指導が求められる70～95%未満、40～70%未満では、「非常に難しい」と感じている割合がほかに比べて少し高い傾向にある。

## 進路指導の困難な要因とは？

### 入試の多様化、指導時間の不足、生徒の進路選択・決定能力の不足

では、進路指導を困難にしている要因はどこにあるのだろうか。該当項目を全て選んでもらったところ、【学

校】「教員が進路指導を行うための時間の不足」67%が前回2014年調査に続きトップ。2位は僅差で【生徒】「進路選択・決定能力の不足」66%、3位【進路環境】「入試の多様化」62%、以下【生徒】「学習意欲の低下」54%、【保護者】「家庭・家族環境の悪化:家計面について」51%と続く(図表2)。カテゴリー別に見ると【生徒の問題】に関する項目が総じてスコアが高い傾向にある。

次に、前回調査との変化に着目すると、【進路環境】「上級学校の学費高騰」「入試の多様化」、【学校】「教員の意欲・能力不足」「旧態依然とした教員

の価値観」、【保護者】「保護者が干渉しすぎる」が前回より概ね3ポイント以上増加している。上級学校の入試の多様化や学費の問題に伴う指導の難しさに加え、

教員の進路指導力や意欲や価値観、そして保護者の干渉の高まりの影響が気になる。他方、減少幅が大きいのは【進路環境】「入試の易下」「産業・労働・雇用環境の変化」「高卒就職市場の変化」となっている。

これらの要因は、進路指導の現場では複雑に交雑していることが推察されるが、最も大きく影響を与えている要因として上位3項目に絞って回答を求めると、「教員が進路指導を行うための時間の不足」「進路選択・決定能力の不足」「入試の多様化」となってくる。

高校の取材を通じて感じていることは、高大接続改革における新テストの動向に不安を抱きながらも、現実問題として、目の前の生徒の進路指導にエネルギーを費やす教員の姿だ。一

般入試とは時期の異なる推薦・AO入試への対応、出願内容・方式の複雑化、膨大な情報下における生徒の志望校選択・進路決定に向けた支援、そして保護者の過干渉等、学校としての進学・進路実績と、個々の生徒の将来を見通した進路選択の指導の狭間で戸惑う声が多数聞こえてくる。

## 大学進学への指導の重視項目は？

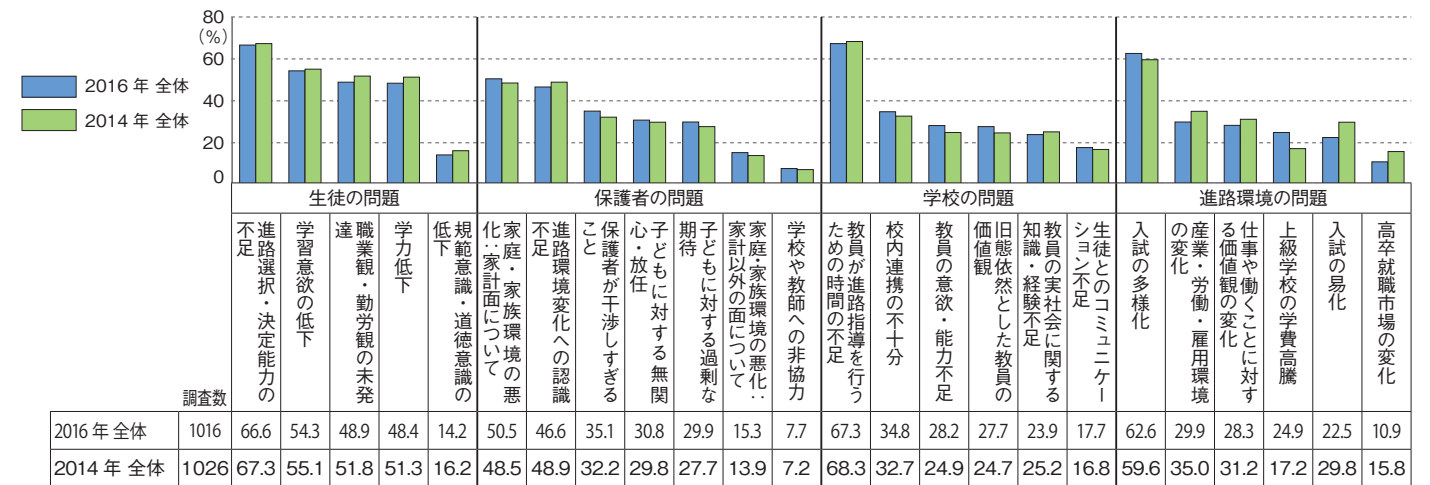
### 教育内容や教授・講師陣の魅力、学習環境などを重視する傾向に

大学への進路指導で学校選びの際にどのような点を重視しているのだろうか。トップは【教育内容・制度】「学びたい学部・学科・コースがあること」79%、2位【構成要員】「学生の面倒見が良いこと」56%、3位【教育内容・制度】「生徒の興味や可能性が広げられ

ること」54%、以下【卒業後】「就職に有利であること」45%、「卒業後に社会で活躍できること」44%が上位を占める(図表3)。

全体傾向としては大きく変わらなかったものの、前回調査との変化では、「学びたい学部・学科・コースがあること」「教育内容のレベルが高いこと」「教授・講師陣が魅力的であること」「学習設備や環境が整っていること」「学費が高くないこと」「伝統や実績があること」など、本質的な学びの項目を中心にスコアの増加が見られる。学部・学科名称だけでは学ぶ内容が純粋に想起できなくなってきた昨今、高校での学びとのつながりとともに、卒業後の社会とのつながりをいかに分かりやすく訴求していくかがポイントになってくるだろう。

図表2 進路指導の困難の要因の変化(進路指導を「難しい」と感じている/複数回答)



※カテゴリーごと「2016年全体」の降順

## フリーコメント

### 「入試の多様化」

- 学習指導要領、入試制度が変わっていくことにより、新たな制度、取り組みを追加していく必要があり、個々の生徒への学習・進路指導などを十分に実施するための時間減少につながる。
- 4月になればAOの指導がはじまり、翌年3月まで国立後期の指導が続く。1年中受験で「教育」ができない。
- 高大接続改革の号令とともに、ここ数年の学部改組や入試変更はとも教師が把握できるものではない。

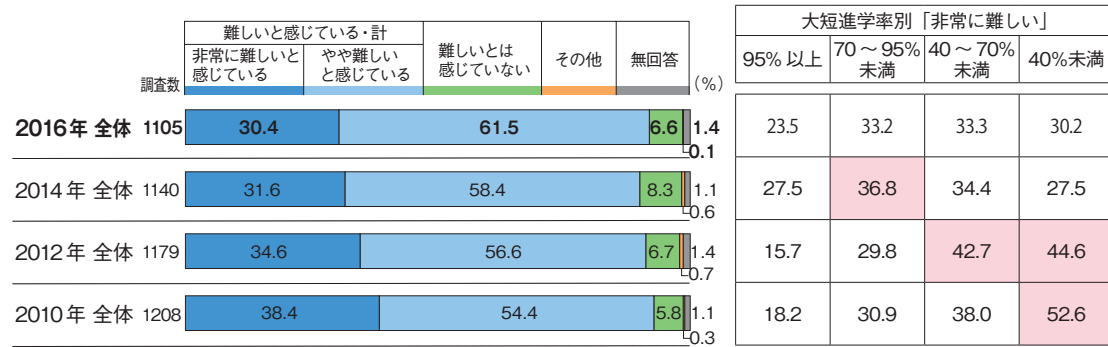
### 「教員が進路指導を行うための時間の不足」

- 教科指導、HR指導、部活指導に多くの時間をとられる。
- 生徒の進路希望や受験方法の多様さに対応しきれていない。

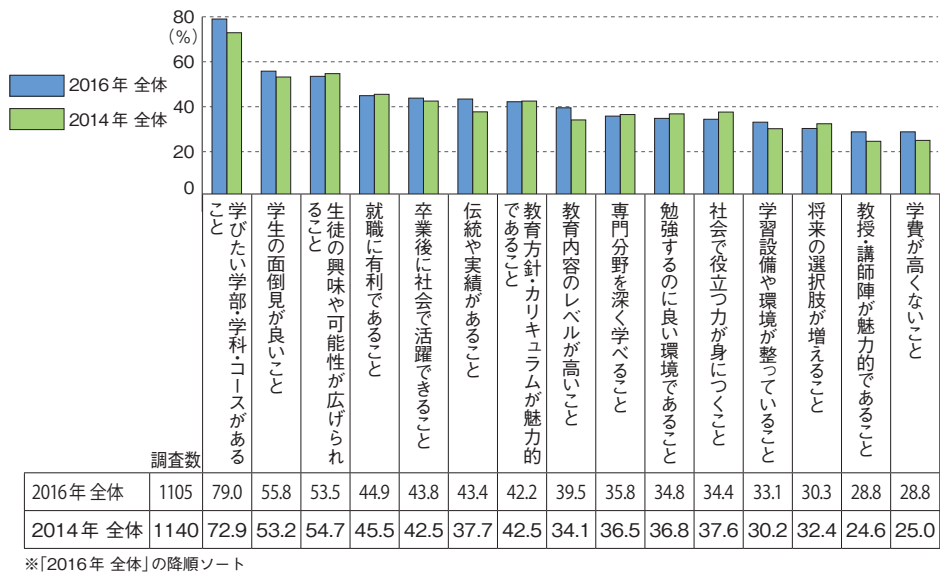
### 「進路選択・決定能力の不足」

- 「行きたい学校」ではなく、「行ける学校」を志望する安全志向が強くなっている。
- 高卒後の幅広い進路選択において、自分の意志で決めきれなく、保護者や教員に頼る傾向が強い。

図表1 現在、進路指導を難しいと感じているか(全体/単一回答)



図表3 進路指導時に生徒の進学先として重視する点(大学)(全体/複数回答):上位15項目



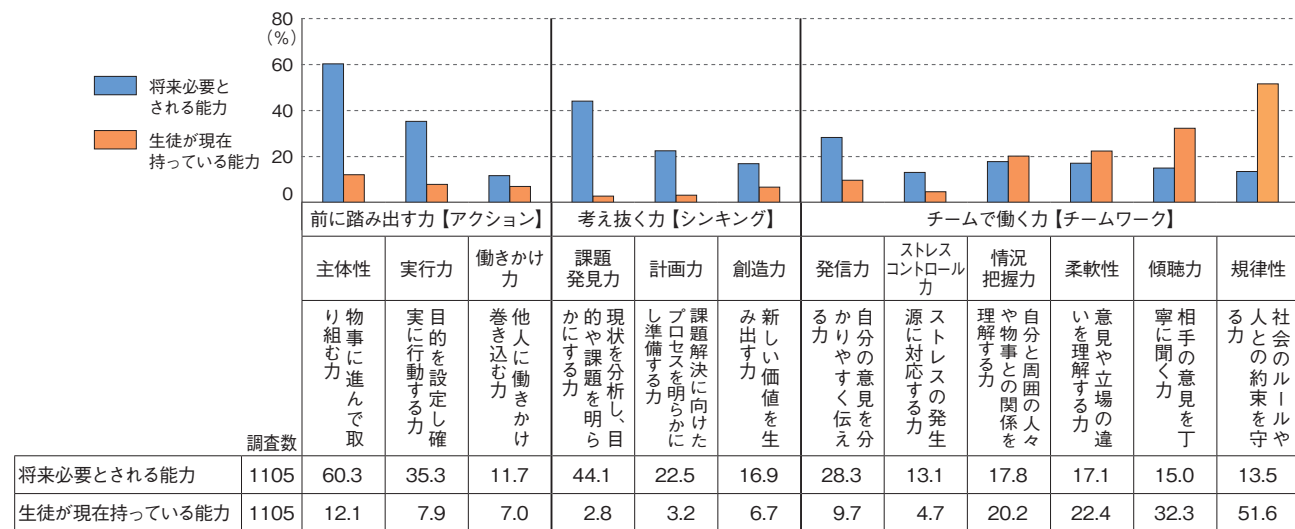
これからの社会で必要とされる  
資質・能力は？

生徒に不足しているのは  
「主体性」「課題発見力」「実行力」

経済産業省で定義されている「社会人基礎力」の12の能力要素のうち、これからの社会で働くにあたって必要とされる能力と、生徒が現在持っている能力をそれぞれ3つまで選択してもらった(図表4)。

まず、必要とされる能力は「主体性」60%、「課題発見力」44%、「実行力」35%がトップ3となり、前回調査と同じ結果だ。一方、生徒が持っている能力は「規律性」が52%で突出、「傾聴力」32%、「柔軟性」22%と続いており、両者の差分から「主体性」「課題発見力」「実行力」等、「主体的に行動する力」が不足していることが窺える。別調査であるが、高校生、ならびに保護者へ

図表4 生徒が将来社会で働くにあたり、「特に必要とされる能力」「生徒が現在持っている能力」(全体/各3つまで回答)



の同質問では、同様の結果が得られている。ただし、「課題発見力」の必要性については、生徒、保護者の調査では上位にランクインせず、教員の見解とは異なっている。

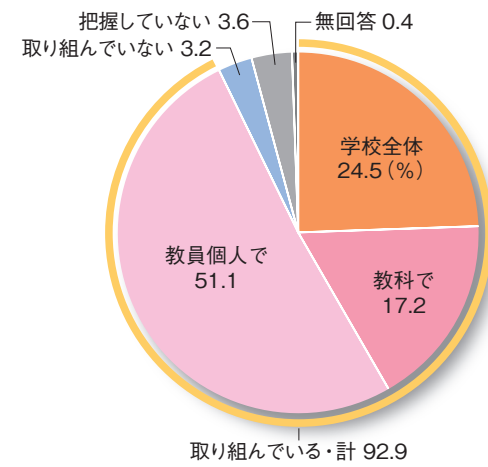
アクティブ・ラーニングの視点による授業改善の取り組み状況は？

飛躍的に取り組みが増加  
反面、不安や疑問の声も

では、高校現場における学びの実践状況、ならびに資質・能力の育成状況はどうだろうか。アクティブ・ラーニング(以下AL)の視点による授業改善への取り組みについて尋ねたところ、全体では93%が取り組んでいるという回答を得た(図表5)。これは前回調査の47%からほぼ倍増しており、この2年で飛躍的に取り組みが進んだことが分かる。ただ詳細に見てみると、学校全体での取り組みは25%に留まり、51%が教員個人による取り組みである。教員間で取り組みに温度差がある実態が浮き彫りになった。

ALの実践が進む一方で、「型に拘っている」「グループワーク=ALと捉え

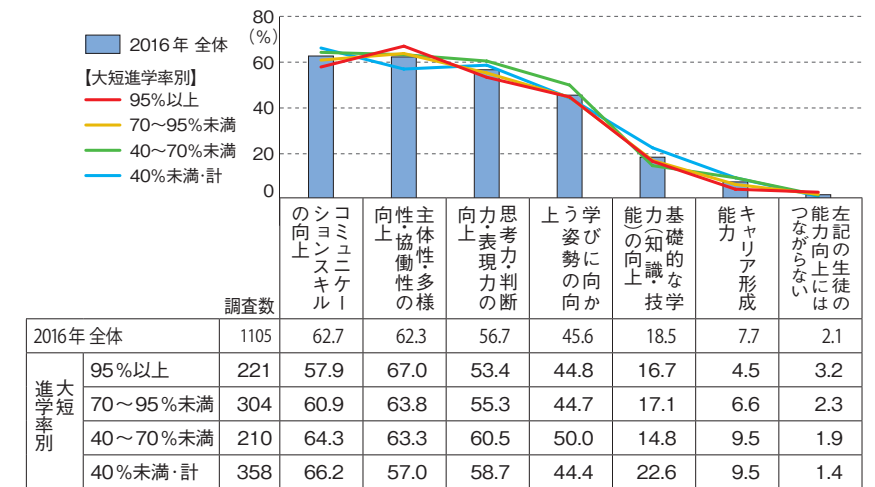
図表5 アクティブ・ラーニングの視点による授業改善に取り組んでいるか(全体/単一回答)



ている」など、ALが目的化しているとの懸念や疑問の声が多数聞こえている(フリーコメント)。文科省はALの視点からの授業改善として「主体的・対話的で深い学び」の3つの視点を掲げ、本質的な学びに向けた授業転換を促している。

ALの視点による授業改善で生徒にどのような資質・能力が身につくかを尋ねた(図表6)。「コミュニケーションスキルの向上」63%、「主体性・多様性・協働性の向上」が僅差で62%、「思考力・判断力・表現力の向上」57%、「学び

図表6 アクティブ・ラーニングの視点による授業改善はどんな力の向上につながると思うか(全体/複数回答)



に向かう姿勢の向上」46%と、上位は4割を超える反面、「基礎的な学力(知識・技能)の向上」は19%と大きくスコアが開く結果となったのは気がかりだ。基礎学力習得への疑問をはじめ、授業進捗の懸念、現状の入試対応への懸念等、不安の声は少なくない。

● 昨年末、次期学習指導要領の改訂についての基本的な方向性が答申されたのは周知の通り。高校の学習指導要領の公示は来年の予定だが、大きな方向性はこの答申で示されている。

「社会に開かれた教育課程」と称し、幼小中、高校、大学・専門学校、そして社会へトランジションしていく学びをどう描いていくか。「学力の3要素」を基軸に高校と高等教育機関の学びがつながり、相互に選抜する仕組みへの転換が求められている。

今回の調査では、様々な現実の問題に向き合いながらも、学びの転換を図る高校現場の実態、教員の心境が見えてきた。決して課題は少なくない。が、大きく一步を踏み出しはじめた、そう感じている。

フリーコメント

- 40名近くの生徒、10グループを把握するのは困難。
- 一見良いムードを持つが、本当に学力向上や力のつく授業になるかは大いに疑問。一部の力のある、積極性のある生徒のための授業にならないか。
- ALのもととなる基本的な知識や考え方をしっかり身につけさせることのほうが重要。ALを強調しすぎると、基礎力不足なのに、応用ばかりやろうとし無駄に終わる。
- ひとつの手法・形式を考えて実施しても、数回繰り返すと生徒間にマンネリ感が生じてくる。
- 本校の生徒のレベルと大学入試との関連を考えると、基礎的な学力(知識・技能)の向上を図ることが優先されるべきであり、全ての授業をALで行うことは、かつての「ゆとり教育」の二の舞になりかねない危惧を抱いている。

- 生徒の学力、学校の施設、設備、予算、人材に大きく影響される。理科の授業例を読んだことがあるが、真面目に取り組めば現在の教科書は終わらない。ある程度の知識量低下は不可避と思われる。大学入試の改革と共に現在とのバランスが大切になる。
- 「アクティブ・ラーニング」という方法をやれば良いと考えている人が多い。教科・科目・単元に合う方法を考え、その結果ALがマッチすればやれば良いだけのこと。
- 何か特別なことを行わなければALにならないと判断され、物事の本質が理解されない不安がある。一斉授業でもALが成り立っている場合もある。
- 教科による特性があるため、なかなか教科を越えて学校全体の研修になりにくい。加えて、ALの導入方法ではなく指導目標が達成されたかどうかの評価について十分に検討されていない。
- 大学入試に向けた指導との関連性が強く感じられない。